

編集後記

ぬけるような青い空と膚寒い早朝の空気をもつ秋10月は行楽と共に学会のシーズンでもあり、呼吸器に関連するものもいくつか開かれている。札幌での癌、肺癌、秋田での大気汚染学会、さらには今回初めて開かれたサルコイドーシス研究会（札幌、世話人平賀洋明）もあつた。国際サルコイドーシス会議は9月にパリで開かれ、11月初めには香港でAPCDGと、関連あるものに全部出ていたら、研究する暇の方がなくなつてしまいそうな、学会繁栄のこの頃である。そして来年春の学会の演題募集公告が、各学会誌に出揃うのも今頃であり、夏休みを終つてふたたび車輪がフルに回り出したような感じのするのが10月である。

本号には2編の原著と、2つの総会シンポジウム記録がおさめられた。原著はいずれも臨床細菌学的課題であり、一つは薬剤耐性に関するもの、他は薬剤感受性と培地内ガスとの問題で、ユニークな視点からの実験成績が報告されている。総会シンポジウムは「肺の気腫化をめぐる」と「胸水の成因と鑑別診断」の二つであるが、今野淳会長の意図が結核と非結核性呼吸器疾患との橋渡しを考えられていることが、他のシンポジウムの課題をみても明らかである。それをひきついで、57年4月の結核病学会総会は、胸部疾患学会総会との合同シンポジウムが持たれることになつており、それは58年の京都での総会でも引き継がれるごとくに進んでいる。

臨床の立場からみれば結核は呼吸器疾患の中で最も頻度の高い疾患であると共に、他の多くの呼吸器疾患との鑑別がたえず必要とされ、両疾患を扱う両学会が別々に存在しているのは、極めて不自然な形と言える。しかしその一方内科学会が細分化し多くの学会が独立して行つたように、胸部疾患も幅広く多くの疾患を扱い演題の数がふえるにつれて、全体のまとまりが乏しくなつてきており、もう少し細分化した方が落ち着いて充分討議できる学会になる可能性もある。結核という一疾患だけの学会というのは、その意味では主題一つを各角度から扱う学会として大変すつきりしたものがあつた、研究面から考えれば、このまま残しておいた方がよいのではないかとと思われる。

最近の両学会の動きには、その将来のあり方の模索が改めてなされ始めているのがみられる。

(岩井和郎)

訂正

本誌 Vol. 56, No. 8 に誤りがありましたので、下記のとおり謹んで訂正いたします。

- p. 406 左段下から 14 行目 肺結核病棟 → 肺結核病巢
p. 409 左段上から 5 行目 1949年以前 → 1549年以前
p. 420 左段下から 9 行目 低かつた → 高かつた

結 核 第 56 卷 第 10 号 (10月号) 毎月 1 回 15 日発行

昭和 56 年 10 月 10 日 印刷 年会費 6,000 円(1部売り定価 700 円)

昭和 56 年 10 月 15 日 発行 (振替) 東京 4-53756

編集兼 島 尾 忠 男 176 東京都練馬区向山 1-14-9

発行人 204 東京都清瀬市松山 3-1-24

発行所 日本結核病学会 結核予防会結核研究所内 電話(0424)91-2540

(ただし、原稿については“101 東京都千代田区三崎町 1-3-12 結核予防会内「結核」編集係(電話(03)292-9211(内線)59番)”をお願いします。)

THE JAPANESE SOCIETY FOR TUBERCULOSIS

c/o Research Institute of Tuberculosis, Japan Anti-Tuberculosis Association,

3-1-24, Matsuyama, Kiyose-shi, Tokyo 180-04 Japan
